

半世紀の柔道人生

東濃地区柔道協会 会長 片田敏司

私が柔道を志したのは、昭和 45 年、中学 1 年生のときでした。小学生時代は野球少年だった私ですが、テレビで観た『柔道一直線』に影響を受け、付知町柔道スポーツ少年団に入団しました。

当時の練習は週 1 回 2 時間で、小学生 90 人、中学生 30 人という大所帯。低学年・高学年・中学生の三部制で、練習会場は公民館講堂（約 60 畳）に畳を毎回敷いて作る簡易道場でした。人口 8 千人の小さな町でありながら、柔道が盛んだったのは、昔ながらの柔道好きな町民気質によるものだったのでしょう。

新設 2 年目の恵那北高校（現・中津高校）に入学した際、職員室で柔道部顧問の狩野聰先生から「今日から入部だ」と一言。こうして柔道部に入部することとなりました。中学時代は硬式野球部の設立を夢見ていましたが、新設校のため叶わず。同じく野球を希望していた新入生とともに 28 名の柔道部が発足しました（3 年生 6 名、2 年生 4 名）。

高校では、朝練・放課後・体育の授業まですべてが柔道漬けの厳しい日々。2 年生になるころには、同級生の部員も 15 名にまで減っていました。新校舎の体育館でも畳を敷く作業は続き、時にはグラウンドや近

隣小学校の講堂を借りての練習も行っていました。

夏の合宿は岐阜市の丸杉道場で、郡上高校と合同開催。当時は岐阜県警・中田喜代司先生ほか多くの先生方からご指導をいただきました。3年生時には部員数が30名となり、岐阜県高校新人柔道大会、インターハイ岐阜県予選で三位の成績を収めることができました。

進路選択の際、「柔道整復師」という道を友人から教えられ、狩野先生の師である故・鈴木輝雄先生の推薦を受けて、中部柔整専門学校へ進学しました。入学の挨拶時、鈴木先生より名古屋市守山区の長谷川接骨院（守山道場）での内弟子生活を勧められ、住み込み生活が始まりました。プレハブ小屋の半分が更衣室、もう半分に二段ベッドがある環境で、夏の暑さは想像を絶するものでした。

中部柔整では週4日が午前中稽古。火曜は名鉄体育館での鈴木先生の授業でした。大学出身の同級生による厳しい指導のもとで練習と勉学に励み、生涯の友を得ることもできました。国家試験には柔道実技と形も含まれており、柔整師と柔道の深いかかわりを感じました。

柔道整復師の資格取得後、5年間の修行を経て昭和57年4月に故郷・付知町で接骨院を開業。少年団の指導にも携わり、間もなく「付知町柔道大会」は半世紀を迎えます。現在はイベント「つけち森の市」に

てステージ上で受け身・形・乱取りを披露し、体験指導も行いながら新入部員獲得に力を入れています。

昭和 59 年、東濃地区柔道協会理事に就任。以後 30 余年にわたり審判員・審判長として活動し、A 級の資格を取得しました。これも偏に千藤安雄名誉会長のご指導の賜物です。

また、岐阜県柔道整復師会の柔道部員として平成 3 年より 30 年間に中田喜代司先生、鈴木幸廣先生、吉田篤生先生に師事し活動を始め、少年大会や東海ブロック大会の運営を行ってきました。日整全国柔道大会では岐阜県少年チームの監督として指導にあたり、準々決勝では丸山兄弟擁する宮崎県に 2 対 2 の代表戦で惜敗するも、貴重な経験となりました。平成 19 年には東海ブロック大会で岐阜県チームとして初出場（五十代大将）で初優勝。翌年には講道館にて全国大会の試合に東海西部チームの大將として出場し、感動の記憶が今も残っています。全国高段者大会には 12 回出場し、平成 31 年には日本傳講道館柔道七段に昇段しました。平成 24 年には「ぎふ清流国体」の柔道競技審判員としてウルフ・アロン選手の試合等を担当するなど、長年の審判歴が評価されたことも誇りです。令和 6 年、日本柔道整復師会より最高栄誉「帰一精錬賞」をいただいたことも、非常に名誉な出来事でした。

少年少女から高齢者まで、誰もが柔道が続けられる環境こそが理想です。今年、高校時代の同級生 2 人が六段を取得し、紅白帯の仲間 6 人が中津川市柔道少年団（NJS）の指導にあたっています。子どもたちと同じ練習メニューをこなす人、マスタース大会入賞者、形競技会入賞者、それぞれが自分の柔道スタイルで古稀まで継続しています。

半世紀にわたる柔道人生。私は特別に強かったわけではありません、「柔道我以外皆我師也・初心生涯」の精神で歩んできました。多くの師、岐阜県柔道協会の要職を担われた重鎮の先生方、先輩、柔整の仲間たち、保護者、子ども達、そして高校から一緒に続けてきた同級生に恵まれ、柔道に携われたことに心から感謝いたします。

最後に、嘉納師範の言葉「柔道は人間教育」が末永く受け継がれることを願ってやみません。